

国際化シンポジウム（第2回・第3回）報告

留学生センター長 土 田 充 義

鹿児島大学が国際化に向けてどんな歩みをしてきたかをたどるために学内向けシンポジウムとして、第2回（平成13年7月11日）は留学生受け入れに焦点を当て、第3回（平成13年12月13日）は留学生教育をとりあげた。それらの内容を各パネラーの先生に記していただき、掲載した。この貴重な報告を今後の留学生センターの礎にしていきたいと考えている。

国際化シンポジウム（第2回）公演内容

(1) 私の国際交流と留学生教育

鹿児島大学水産学部教授 手 島 新 一

1) 大学における国際化とは

国際化とは何か？ 国際交流とは何か？

2) 国際学術交流、国際技術協力およびその他

外国人の受入と日本人の派遣

3) 国際交流のための財源

4) 学内における国際交流（外国人留学生・研修生の教育など）

外国人留学生の種類と留学生の受入と問題点

5) 学外における国際交流

国際交流の種類および国際共同研究と国際技術協力の問題点

6) 研究室における国際共同研究と留学生の教育研究

(1) 研究室歩みと国際交流の概略（水産化学、栄養化学、水族栄養学）

(2) 国際共同研究

(3) 留学生の教育研究（修士修了者と博士取得者）

(4) 研究室の運営方針

7) 水産学部の国際交流（過去5年間の概略）

拠点大学方式による学術交流事業と水産学部の学術振興基金

8) 国際交流を推進するには

御紹介に預かりました水産学部の手島です。専門はもともと水産化学で、海産無脊椎動物のステロールの構造決定などを行っていましたが、現在では、水族栄養化学が専門で、エビや魚のエサ（飼料や餌料）、栄養要求、栄養代謝などについて研究しています。私がこういう席でお話しするのに適当な人物であるかどうかは、分かりませんが、私なりに国際交流は30年以上も続けていますので、経験などをお話しして、何かのお役に立てば幸いと思い、この席に立つことに致しました。

1) 大学における国際化とは

よく、「国際化」とか「国際交流」という言葉を耳にしましたが、大学における国際化や国際交流とは何か、再認識することも必要だと思います。何故ならば、各人が抱えている国際化とか国際交流という概念や認識は、必ずしも同じではないからです。私なりに考えてみますと、「大学における国際化とは、国際的な視点からものを考え、大学人として国際的に行動（国際交流）すること」ではないかと思います。また、国際交流は、何を交流するのが、問題です。

外国人が日本の大学にくる目的は、(1) 留学生の場合は（修士、博士の学位の取得、高い奨学金の受給、日本に対する興味）、(2) 研究者の場合は（共同研究、知識技術の修得、日本に対する興味）等であり、当たり前のことですが、そう言ったことに関して魅力のない大学や研究室には、外国人は来ないと思います。一方、日本人が海外渡航する目的は、学生の場合は（修士、博士の学位の取得、海外に対する興味）、研究者の場合は（知識技術の修得、国際会議出席、共同研究、海外に対する興味）等でしょう。

2) 国際学術交流、国際技術協力およびその他

大学における国際交流は、受入と派遣の両方があり、その目的や内容は多様です。また、地方のイベントへの留学生の参加など、学術交流・技術協力以外の国際交流もありますが、直接的であれ、間接的であれ、(日本人や外国人が) 大学での勉強や研究に資するために交流を行うというのが、大学における国際交流の基本であると思います。外国人は、留学生（学部、修士、博士課程）のほかに、技術修得を目的とした研修員（JICA, OFCFなど）や若い研究者、共同研究のために訪れる研究者などです。受入については、このような多様な外国人に対して、我々が受け入れる体制があるかどうかは問題です。一方、派遣の方は、知識技術の修得を目的とした学生の派遣、教官の派遣、教官の国際会議出席、共同研究、技術協力のための派遣などがあります。幸か不幸か、私はこれらの受入、派遣のほとんどを体験することができました。

3) 国際交流のための財源

それから、国際交流を実施するには、お金（財源）が必要であるということも忘れてならないことの一つです。如何なる財源で、どの程度の規模で国際交流を行うか、それを考えなければ、いくら良い計画でも、(プランだけに留まり、) 実行されないままで終わります。外国人の学生、技術者、研究者等は、国費などの日本の財源、外国政府等の財源、私費などで来日します。日本人の場合も、

同様な財源で海外に行きますが、その財源が十分でないことは皆様、ご承知の通りです。日本における財源は、文部科学省、日本学術振興会、国際協力事業団（JICA）、笹川基金、その他の基金、委任経理金などで、国際交流（受入・派遣）が行われています。

4) 学内における国際交流（外国人留学生・研修生の教育など）

国際交流は、学内で行われるものと学外で行われるものとに、大別されます。まず、学内で行われる国際交流について、その内容と問題点を考えてみましょう。研究者やJICA研修員の受入は、受入教官等（個人、研究室あるいは特定のグループがその単位となります）が中心になって作成した計画に基づいて行われますので、その成否はひとえに受入教官等の受入体制や力量にかかっています。問題は、比較的人数の多い留学生の受入です。外国人留学生は、(a) 大使館推薦文部科学省留学生、(b) 大学推薦文部科学省留学生、(c) その他の日本の奨学金留学生、(d) 外国の奨学金留学生、(e) 私費留学生などがあり、それぞれに異なった問題をもっています。例えば、言葉については、十分な語学力（日本語、英語、スペイン語など）のない学生をどうするか？ また、授業については、英語の授業は？ 日本人と外国人共存クラスでの授業方法は？ 実験をさせる際にインストラクターはいるのか？ 外国語の図書は整備されているか？ 生活面では（本人、家族の生活のバックアップ）、金銭（経済的な援助方法や学位がとれない場合の滞在方法）など、抱えている問題は多種多様です。

5) 学外における国際交流

学外で行われる国際交流は、(1)国際会議出席・講演、(2)国際共同研究、(3)国際会議の開催、(4)拠点大学方式の学術交流、(5)大学間協定による教官学生の交流、(6)国際技術協力などがあります。

それぞれに多くの問題や課題があり、解決方法も異なりますが、ここでは、国際共同研究と国際技術協力の問題点を考えてみましょう。まず言葉の問題があります。語学力が不十分なために十分なコミュニケーションが出来ず、満足いく成果が得られなかったというケースは、多々あると思います。教官、学生の語学力増強の方策は？ どうすればいいのでしょうか？ それから、スペース（狭隘さを如何にするのか？）、実験設備と図書（十分整備されているのか？）などの問題があります。また、国際交流のために必要な財源の調達は、うまくいっているのでしょうか？ 国際会議出席・講演（旅費の財源は？）、国際共同研究（実験や調査実施、渡航のための財源は？）、国際会議の開催（スポンサー探し、実行委員会の組織づくりなど）、大学間協定による教官学生の交流（促進するための財源は？）、拠点大学方式の学術交流（協力大学との連絡、事務当局の助力、受入・派遣の研究者の選考など）など、問題は山積しています。

一方、国際技術協力はJICAなどがスポンサーとなりますから、財源についてはそれほど問題は有りません。ついこの前、派遣された日本人の国連職員が給料を国連からも外務省からも貰っている、二重取りしていると問題になりましたが、JICAで派遣される大学教官の場合も文部科学省と外務省の両方から給料をもらいますので、手取りは2倍以上になります。むしろ問題は、大学教官が、専

門家として長期間海外に滞在する場合、本務との関係、すなわち大学を留守するのだから必ず戦力ダウンになるはずであるが（ならないとすれば、その教官は存在価値がないことになります）、それを如何にカバーするか等の留守中の処置、また、外国人を受け入れる際、技術協力の要請の内容と大学の教育研究プログラムとのズレなどの問題があります。とくに教授の場合、半年以上も海外出張する場合は、完全に留守中の手当てをすることは難しくなります。

6) 研究室における国際共同研究と留学生の教育研究

以上、一般的なことを述べてきましたが、次に、私の研究交流や留学生の教育について、お話ししたいと思います。かなり手前味噌の話になるが、御容赦ください。

(1) 1ドル360円の時代

私が鹿大に赴任したころは1ドル360円の時代で、闇ドルという言葉もあった位で、自由に海外に行ける時代ではありませんでした。したがって、私も最初から国際交流に目を向けていた訳ではありません。ただ、オリジナリテイのある研究をしたい。出来るだけ多くの人に読んでもらうために、書く論文はすべて英語で書こう。出来れば、海外に行ってみたい・・・というような、漠然とした目標しか持っていませんでした。何しろ当時は、文部省の長期在外研究は旧制大学の人しか採択されず、研究室の上司の金澤助教授（当時）は、在外研究の申請書類を出そうとしたら、鹿大の本部の事務当局から「先生、そんなもの当たりっこないですよ。これはマスターやドクターのある旧制大学の先生のためのものですよ」と親切な御助言を頂いたそうです。（独立法人化や大学の区別化が進むと、また、そういう時代に逆戻りするのではないかと危惧されます）。結果的には、何度か申請するうちに、採択（1965年度）され、その後、それに勇気を得て、水産学部の他の教官や他学部の先生方も申請するようになったと聞いております。

当時、私も若い内に海外で長期間研究し、語学力も身に付けたいと思っていましたが、文部省の在外研究は、年々学内の応募者が増え、年功序列で申請、採択されるような状態でした。また、日本学術振興会の研究者海外派遣にも応募しましたが、英国への自然科学系の希望者は122人いて、結局、イギリスで5年間研究した人と当時イギリスで研究していた人の2名が選ばれました。私は、一時選考にパスし、イギリス人が行う面接試験を受けましたが、結果的には3位で補欠でした。その翌年も応募しましたが、やはり補欠でした。落ちた理由は、はっきりしていました。私の英語力が貧弱で、会話力のある、自己表現できる有能な研究者が選ばれたということです。2回も自費で東京まで面接に行って落ちたので、薄給の私はお金も惜しく、八つ当たり気味に、努力もしないで年功序列で選ばれ、海外に留学してハクをつけようと考えている鹿大の教官のことを思うと腹も立ちましたが、仕方がありません。日本学術振興会JSPSとの最初の出会いは、このようにホロ苦いものでしたが、後に日本学術振興会とは、多くのかかわり合いを持つことになります。

(2) 国際交流の発端

まず、私達の研究室が国際交流を行うきっかけになったのは、1969年に修士課程の水産学研究科

が設置され、研究が活発になり、1970年に「クルマエビの飼料の開発と栄養要求」、「甲殻類のステロール代謝」などの論文を発表したのが、その始まりです。論文を見たフランスやイギリスの研究者が研究室を訪れ、粗末な設備や狭隘な実験室を見て、驚きと疑惑の入ったまなざしを向けたことを覚えています。ともかくも、それが発端となり、彼等と情報交換をすることになり、日本学術振興会に国際共同研究（他国間の共同研究で、自然科学分野で13-15件採択／年）を申請し、採択され、1972年度からマルセイユ大学及びノースウエルズ大学と国際共同研究が始まりました。当時、研究室は90万円程度の年間予算で運営していましたが、日本学術振興会からは300-500万円／年の予算を頂き、4年間（1972-1976年）に亘り、日本人をフランスに派遣するとともに、フランス人を受け入れました。当時は、バス付のマンションではなく、来鹿した金髪のフランス人女性は、下荒田の竹迫温泉で好奇の目を向けられ困っていました。マルセイユ大学のセカルジュー博士や、今はタヒチの研究所にいるクゾン Cuzon 博士も研究室に数カ月間滞在しました。十数年後に、彼等と協議し、国際的な甲殻類栄養学グループとなるIWGCN（International Working Group of Crustacean Nutrition）を発足させましたが、その始まりは私達の国際共同研究でした。

その後、鴨池臨海地に緊急営繕費で海洋生産実験室が設置され、設備も整ってきました。しかし、私の海外で研究してみたいという夢は実現しそうもありませんでした。文部省の在外研究は当分当たる見込みがなく、じっと待っていても45歳過ぎにならないと当たらない。「とても待つてはいられない」そう思った私は、海外で給料を貰おうと思い、積極的に海外の学者と接触し、招聘者として予算申請してくれるように依頼しました。数年間、そのようなことを続けましたが、幸いにも1974年にリバプール大学の上級招聘研究員（Senoir Research Fellow; Science Research Council, UK）としてL.J. Goad 博士と1年間共同研究を実施することが出来ました。イギリスまでの航空運賃は、自費で負担しましたが、当時はドルやポンドが強く、格安航空券もほとんどなく、イギリスまでのエコノミーの片道が30万円かかり、私の給料の10ヶ月分に相当しました。当時、50万都市のリバプール市には、日本人は私と妻を含めて9人しかいませんでした。また、1979年には、メリーランド大学の招聘研究員（Sea Grant, USA）として、G.W. Patterson博士（1979.8-1980.3）と8ヶ月間、共同研究をすることができました。アメリカからの帰途、スコットランドの海洋生化学研究（Scotland, UK）に1月ほど滞在し、C. Cowey博士と共同研究の打ち合わせを行いました。このように、比較的若い時に海外で研究出来たのは、当時の金澤助教授と関連講座の先生方の理解と協力があったからに他なりません。

（3）欧米の研究者との国際交流

その後、ノースウエルズ大学とは、国際交流協定、今で言う部局間協定を締結（1980年）し、日本人学生をイギリスに派遣するとともに、イギリス人学生、研究者を受入れました。1981年には、嬉しいことに、アメリカのデラウェアで開かれた第2回水産増養殖栄養学会議に、招待講演者の一人として選ばれる幸運に浴しました。招待講演の定義は、色々あると思いますが、私は「会議などの開催者から経済的支援を受けて講演すること」だと思っています。お金を出してまで来て欲しい

と要請されることは、プロとして認められたことを意味し、金額の大小ではなく嬉しいものです。その時、投稿した論文の校閲をしてくれたのが、デラウェア大学にいたイギリス人のラングドン博士でした。彼の厳しいが、論理的な英文校閲と査読は、後の論文作成の参考になりました。その時の赤くコメントのついた原稿は今でも持っています。後に、彼はオレゴン大学に移りましたが、日本学術振興会の招聘研究者として、1年近く私の研究室に滞在し、微粒子飼料について共同研究を行いました。アメリカやイギリスの研究者と接触するチャンスを得たのが、2回目の国際共同研究につながりました。すなわち、1983年には、ノースウエルズ大学、海洋生化学研究所（UK）、ワシントン大学と私の研究室の3ヶ国間の国際共同研究が採択され（日本学術振興会、国際共同研究1983-1985年）、研究者の交流を行いました。1989年には、ワシントン大学と国際交流協定を締結し、交換留学生として派遣した研究室の学生、現在高知大学教授の益本俊郎（昭和61年水産学研究科修了）が後にワシントン大学でPh.D.を取得しました。

1985年、当時、私はクルマエビが正常な成長、生残のためには、ステロールのほかにリン脂質（アサリ由来）を必須栄養素として要求することを発表していました。ほぼ同時期に、カリフォルニア大学のコンクリン博士やダブラモ博士もロブスター（*Homarus americanus*）が正常な成長や脱皮のためにリン脂質（ダイズ由来）を必要とすることを報告していました。そこで、アメリカに渡航し、両博士のいるボデガベイ研究所を訪問し、意見交換を行った後、Woods Hole研究所で開かれた第14回UJNR会議（United State-Japan Natural Resources Congress）に出席し、研究内容を発表しました。その時、出席していたカナダのカステル博士からファリファクスにきて、講演してくれないかと依頼され、数日後、ポートランドから夜行便のフェリーでカナダに渡り、翌日の午前中にFisheries & Oceanで1時間の講演を行い、1時間の質疑応答を受けました。現在、私の研究室の越塩俊介助教授は、当時カナダのダウハウジー大学の博士課程の学生で、カステル博士は彼の指導教官supervisorsの一人でした。そんなことが縁で、後にPh.D.を取得した越塩俊介は、水産学部助手に採用されることになりました。当時、私の研究室は、国際交流や留学生教育を活発に行っていましたので、採用に当たっては、「水族栄養学を研究分野とし、語学に堪能な人物であること」を採用条件の一つに入れました。今後、国際交流を活発に行うためには、私よりも、ずっと語学に堪能な若い人が必要であると考えていたからです。また、エビや魚類の飼料や栄養学を学びたいという留学希望者や技術協力の要請も増えていましたので、今後、それに対応できる体制を整えるには、そのような人物が必要であると思いました。

（4）東南アジアの研究者との国際交流

お話ししましたように、1985年頃までは、欧米の研究者との学術交流が、研究室の国際交流の中心でした。発展途上国からの留学生やJICA研修員は、これまでに多数受け入れていましたが、私自身は東南アジアに行ったことはありませんでした。その後、水産学部の学部長であった柿本教授が企画され、マレーシア農科大学の水産学部拡充計画に伴うJICAの技術協力に学部として取り組むことになりました。そして、私も、プロジェクトのチームリーダーであった川村軍蔵先生に要請され

て、1986年から4回（それぞれ1ヶ月）、JICAの専門家としてマレイシア農科学大学で技術協力を行いました。この経験は、後に拠点大学方式で学術交流を企画するのに色々と役立ちました。

（5）国際会議の企画・開催

1988年に、鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）が設置されると、留学希望者も増加してきました。一方、私の研究分野では、国際会議を日本で開催して欲しいと、たびたび要請されるようになってきました。ただ国際会議に参加して、講演すればよいという状態ではなくなってきたのです。それで、1989年には、日本側研究者（渡邊 武教授ほか）が企画責任者となって、魚類の栄養と飼料のシンポジウムInternational Symposium on Fish Nutrition and Feedingを鳥羽で開催しました。また、2000年にも宮崎のシーガイアで上記のシンポジウムを開催しました。90年代にはいり、1992年にハイファ、テルアビブ、エイラトの3ヶ所で開かれたイスラエルー日本増養殖シンポジウムに招かれて講演（金澤、手島）しましたが、1994年には日本ーイスラエル増養殖シンポジウムを日本で開いてくれという話になり、鹿児島で同シンポジウムを開催しました。また、シンガポールで開かれた第4回国際甲殻類栄養シンポジウムでも招待講演しましたが、その時「甲殻類栄養学」の纏まった本を出版しようという話になり、「Crustacean Nutrition」という題名の本を世界増養殖学会から出版しました。ところが、第5回は日本で行ってくれと頼まれ、1995年に同シンポジウムを鹿児島大学で開催しました。この種のシンポジウムの企画・開催には、如何にして必要な人手と財源を調達するかが、重要なポイントとなります。甲殻類栄養シンポジウム（開催費用は1千万円程度かかりました）の時は、文部省の国際会議開催費の申請も行い、結果的には採択され200万円ほど頂きましたが、4月に開催するのに採択の通知があったのは2月でした。すなわち、文部省の開催費用だけを当てにしていたら、国際会議などは開けないということです。申請が採択されなくても、開催するつもりと準備がなければならないということを痛感しました。国際甲殻類栄養シンポジウムは、約90名の外国人、60名の日本人の計150名のシンポジウムでしたが、外国人留学生を含む研究室のメンバーで、ほとんどすべての雑用をこなしました。会議のプロシーディングスは、国際誌の「Reviews in Aquatic Science」と「Aquaculture Nutrition」に掲載しました。その出版交渉は越塩助教授が精力的に行いました。招待されたら、日本でも同じような国際会議を開催して、招待するというのが、国際的な暗黙の了解のようで、礼儀正しい(?)はずの日本や日本人は、その点に関する意識が薄いのではないかと思います。一方的にオンブにダッコされる時代は過ぎたのに、その認識が少ないということです。

1999年には、私と越塩助教授は、世界増養殖学会World Aquaculture Society (WAS) 主催のWorld Aquaculture'99 (Sydney) に招待され、それぞれ基調講演を行いました。また、越塩助教授は1995年に日米学術交流事業 (JPPS) で、アメリカのダブロウスキー教授 (オハイオ大学) と共同研究を実施しました。1999年にはWASの日本支部の部局長や理事 (越塩: 部局長1999.1-2003.1; 理事1999.1-2002.1) として、現在も活躍しております。一方、私は1997年、鹿児島大学とフィリピン大学拠点大学とする、日本学術振興会の拠点大学方式の水産学分野でフィリピンを相手国とした学術交流

事業を企画し、採択され、1998年から日本側コーディネーターを2年間務めました。

(6) 研究室の外国人

以上、研究室の国際交流について概略を述べてきましたが、これまでに研究室に滞在した外国人（数週間以上）は28ヶ国に及び、文化、宗教の違いなど、彼等から多くのことを学ぶことができました。外国人の目的は、2つに大別されます。アジア（インドネシア、フィリピン、タイ、バングラデシュ、中国、韓国、ミャンマー、台湾、マレーシア、インド）、中近東（トルコ、クエート）、アフリカ（エジプト、チュニジア、モーリシャス、ザンビア）、中南米（メキシコ、エクアドル、チリ、ペルー、コロンビア）、フィジーなど多くの発展途上国の人は、主として留学生や研修員として、一方、イギリス、オランダ、スペイン、アメリカ合衆国、ノールウエー等の国の人々は、共同研究のためや招聘研究員として、研究室に滞在しました。平成元年（1988年）以降に研究室に受入れた外国人研究者をTable 1 に示しましたが、韓国、メキシコ、エジプト、イギリス、マレーシア、アメリカ、ノルウエー、オランダ、フィリピン、インドネシアなど様々な国の人々が研究室を訪れています。また、その間に日本人学生も5名、アメリカやオーストラリアに派遣しております。

Table 1 平成元年（1988）以降に研究室に受入れた外国人研究者

1	1988	キム	Kim Jae Sig（金存植） 斗山研究所、東洋ビール（株） (1988.6-1988.12)	KOREA
2	1989	キム	Kim Kui Shik（金貴植） Yeosu Fisheries University University (1989.10-1990)	KOREA
3	1989	サンドラ	Sandra Gamez Eternod 国立都市開発研究所（1989.7-1989.12）	MEXICO
4	1990	エルセイド	Abdel-Fattah M. El-Sayed Alexandria University（1990.4-1990.7）	EGYPT
5	1990	ゴード	L. John Goad University of Liverpool（1990.1）	U.K.
6	1990	タン	Tang Twen Poh Fisheries Research Station（1990.5）	MALAYSIA
7	1991	ラングドン	Christopher Langdon Hattfield Marine Research Center, Oregon University（1991.4）	U.S.A.
8	1994	タベニサ	Tavenisa Vereivalu Nanduruoulou Fisheries Experimental Station南大平洋大学 (1992.2-1992.4)	FIJI
9	1994	キム	Kyu-Il Kim Cheju National University (1992.8-1992.8)	KOREA
10	1996	ムリンガ	Musonda Venantious Mulenga National Aquaculture Research and Development Center (1996.2-1996.3)	ZAMBIA

11	1996	イバ	Ivar Ronnenstad University of Bergen (1994)	NORWAY
12	1996	ヨースト	Joost Blom Ohio State University (1996.4-1997.3)	NETHERLANDS
13	1996	スウェリア	Ketut Suweiria Gondol Research Station for Coastal Fisheries (1996.9-1996.12)	INDONESIA
14	1997	ミリアメナ	Oseni Maribojo Millamena Southeast Asian Fisheries Development Center (SEAFDEC) (1997.6-1997.7)	PHILIPPINES
15	1998	オルガ	Olga Venkatansmi Albion Fisheries Research Center (1998.3-1998.4)	MAURITIUS
16	1998	ミリアメナ	Oseni Millamena Southeast Asian Fisheries Development Center (SEAFDEC) (1998.6-1998.7)	PHILIPPINES
17	1999	ミリアメナ	Oseni Maribojo Millamena Southeast Asian Fisheries Development Center (SEAFDEC) (1999.1-1999.1)	PHILIPPINES
18	1998	アルマ	Armertonnette A. De La Cruz Research student (1998.9-1999.3)	PHILIPPINES
19	1998	ムラット	Murat Yigit Institute of Science, Ondokuz Navis University (1998.9-2000.5)	TURKEY
20	1998	エルリンダ	Erlinda Naret College of Fisheries, University of Philippines (1998.)	PHILIPPINES
21	1999	エルリンダ	Erlinda Naret College of Fisheries, University of Philippines (1999.10)	PHILIPPINES
22	1999	ロベス	Jorge Lopez Universi dad de Narino (1999.10-2000.9)	COLUMBIA
23	2000	ハンス	Hans Bhudoye Ministry of Fisheries and Cooperative of Albion Fishereies Research Center (2000.5-2000.7)	MAURITIUS
24	2000	ピナンドヨ	Ir. Pinandoyo Faculty of Fisheries and Marine Science, University Diponegoro (2000.8-2000.10)	INDONESIA
25	2000	メイ	Mae Catacutan Southeast Asian Fisheries Development Center (SEAFDEC) (2000.8-2000.9)	PHILIPPINES
26	2000	ドレザ	Loudez Dureza College of Fisheries, University of Philippines (1999.9)	PHILIPPINES
27	2000	JICA研修員	JICA研修コース (水産大学校) 「魚類・環境管理コース」 イグナシオIgnacio Masson (Argentina) クリスチアンChristian Eduardo Sylvester Zapata (Chile) カルメンCarmen Leticia Sousa Gomez (Panama)	

			ロースイ Rosy Lumajen Janeo (Philippines)	
			チチポーン Thitiporn Laoprasert (Thailand)	
28	2000	ギリ	Nyoman Adiasmara Giri Gondol Research Station for Coastal Fisheries (2000.8.20-2000.10.13)	INDONESIA
29	2001	メイ	Mae Catacutan Southeast Asian Fisheries Development Center (SEAFDEC) (2001.9-2001.10)	PHILIPPINES
30	2002	メイ	Mae Catacutan Southeast Asian Fisheries Development Center (SEAFDEC) (2002.6-2000.7)	PHILIPPINES

(7) 研究室の留学生教育

このように比較的多数の外国人を受け入れたり、学生を派遣したりしましたが、それがどうして可能であったかを改めて考えてみますと、まず研究室内は勿論のこと、国内の研究者とも連絡を密にし、組織的な教育研究を行ったことに尽きます。研究室内では、教官がお互いの研究内容や計画をオープンにし、議論を繰り返した後、研究課題を精選し、その内容を再び留学生と納得の行くまで論議しました。その一方で、研究手法を学生（日本人および留学生）や研究者に伝え（1970年の半ば頃から実験手法の英文マニュアルを作成し、それを頻繁に改訂しました。）、ある一定の研究成果が得られたならば、速やかに論文として公表しました。いくら素晴らしい研究を行っても、こちらから情報を発信しない限り、研究室以外の人間はそれを知ることはできません。私は、成果の公表は研究者にとって不可欠な義務だと思っています。それは、また、研究室の実績を示すことになり、研究費獲得の確率を高め、大学院希望者の増加にもつながり、研究も増々活性化されます。制度上、いかなる新しい組織（研究室、講座、学科など）を制度上でつくっても、それを構成する人間が本気で組織的に教育研究を行おうという気にならなければ、紙の上の制度以外の何ものでもありません。大学の組織改革と称して、全国あっちこちに大講座ができていますが、“講座”が組織として十分に機能しているのでしょうか、教官の孤立化を深めるのに都合のよい制度になっていないのでしょうか？ 双方向の国際交流を行うと、どうしても海外出張する必要に迫られます。その時に、留守中の様々なこと（研究、学生の教育、学部、大学の運営など）を補完するシステム（あるいは人間関係）が構築されていなければなりません。講義だけを補講すれば、何とかなる（常勤の教官の仕事は、講義だけではないはずですが）、そんな安易な態度、個人の都合だけで海外出張するようでは、多くの人に支持されるような国際交流などできるはずもなく、むしろ国際交流に水をさすことになります。

私達は、研究室のモードや人間関係をよくするために、次のような方針で研究室を運営してきました。

- ・外国人と日本人とを区別しない（同じ研究室のルールで仕事を行う*）。
- ・外国人にも日本人と同じ義務（物品の注文や管理、掃除など）を負わせる。

- ・研究するための研究費は稼ぐものであると認識する。

研究の開始は、テーマの設定と必要な予算の調達から始まる。

研究室の予算をオープンにして研究を行う。

- ・個人の研究課題の他に、研究室の研究課題がある。
 - ・設備、機器、装置の維持管理は、研究者が各自で行う。
 - ・経験のある学生は、経験の浅い者に技術を移転する。
 - ・研究成果は必ず、英語で公表（できれば国際誌に掲載）する。
- *研究室のルールなどを学生と相談して決め、留学生にも理解できるように英文で作成（印刷）したり、週に一回研究室全員が集まってミーティングしたりしています。

特に目を引くような新しい方針はありません。どこの研究室でもかかげている方針や目標であると思います。私達は、そのような方針やルールをかなり頑なに維持し、長い間に亘って実践してきました。理念や目標のアドバルーンを上げるだけではなく、本気で実行する。このことが、国際交流だけではなく、大学の姿勢として必要であると、私は思っています。

7) 水産学部の国際交流

水産学部の国際交流については、時間の都合で述べることはできませんが、「学園白書No.3, p.56-60. 2001年」（鹿児島大学水産学部評価委員会発行）に詳しく記載されていますので、それを参照していただければ幸いに存じます。ただ、設立から初期の事業実施まで、深く関わった「拠点大学方式による学術交流事業」と「水産学部の学術振興基金」について少ししお話いたします。

(1) 拠点大学方式による学術交流事業

拠点大学方式による学術交流事業とは、日本学術振興会がアジア諸国などとの学術交流の発展を目的に実施している事業の一つです。日本と相手国に中核となる大学（拠点大学）を設け、それぞれの国で協力大学を設け、研究者グループを構成し、特定分野（医学、理学、水産学分野など）の研究を組織的に行うことを目的としています。日本学術振興会は、1997年度は、14分野で6ヶ国25交流を実施していました。鹿児島大学水産学部は、拠点大学方式によるフィリピン大学(UP System)との学術交流（水産学分野）を1998年度から2007年度までの10年間の計画で実施しています。初年度は、協力大学として、日本側は北海道大学、東京水産大学、京都大学、九州大学など14大学、フィリピン側は拠点大学のフィリピン大学ビサヤス校（パナイ島、ミアガオ）の他に9大学が参加しました。鹿児島大学が拠点大学となるのは初めてで、事業実行委員長（コーディネーター）として、責任の重さを痛感したものでした。「フィリピン水域の水産資源の環境保全的開発と利用」という研究課題のもとに、年間約2,000万円の予算で、(1)研究者交流、(2)共同研究および(3)セミナーの開催を行っています。共同研究については、水産環境、経済経営、漁業技術、水産増養殖、水産食品の5分野で、双方の国から各分野で研究者を毎年3、4名ずつお互いの国へ派遣しています。研究は集合的ではなく総合的に行うという方針のもとに、各研究分野へ派遣・受入の人数・日数などを毎

年均等に割り当ててではなく、共同研究の実績をあげるという観点から計画を作成しています。こういう事業は、ともすれば既得権の確保や奪い合いになりがちです。そのような態度に陥ることを極力排除してきました。交流事業は4年間経過しましたが、拠点大学方式による日・比両国の交流研究者は毎年30名以上で、両国の水産学分野の学術交流に貢献したのではないかと自負しています。

(2) 水産学部の学術振興基金について

水産学部は、50周年記念事業の一つとして、水産学部学術振興基金を設けています。学術振興基金は、水産学部における教育・研究活動に対して必要な援助を行い、教育研究の活性化に寄与することを目的としています。その基金の一部は、国際交流助成費および在外研究活動助成費に当てられています。在外研究活動助成費では、若手教官の海外研修助成および国際会議出席の助成を毎年行っており、それが水産学部の国際化や学術のレベルアップにつながることを期待しています。

8) 国際交流を推進するには

最後に、「国際交流を促進するには、どうすればいいか」について、私の考えを述べます。大学で国際交流に必要なものは、まず、外国人に伝えるべき知識や情報をもった日本人教官、学生がいることで、そして、それを欲する外国人がいることです。勿論、それをサポートする環境（事務、組織、建物、設備、財源など）が必要です。しかし何といたっても、国際交流をしたい人、する必要のある人がいるというのが、一番肝心です。そういう人がいて、初めて学校という組織的に教育を行う場（大学もその一つ）で、国際的に研究教育、技術協力が行われるのです。外国人を受け入れるのであれば、当然、教育・研究の理念・目標も国際化する必要があります。また、事務当局も、事務職員の配置や語学能力の向上を計り、国際化に対応できるように受入れ体制を整える必要があると思います。多くの事務官は大学を出ているのに、ほとんど全部の書類を教官が翻訳しなければならないというようでは困ります。先に述べました「拠点大学方式による国際交流」場合も、拠点大学（鹿児島大学）で多くの研究者の交流の世話をするので、それに伴う事務量の増加は大変なものでした。幸いにも、水産学部では、当時の事務長や国際交流に熱意のある事務官の献身的な協力のお陰でスムーズに事業を実施することができました。

私は、留学や研究をめぐる人の流れは、水の流れと同様で、基本的には高い所から低い所へ流れると思っています。先進諸国と対等に学術交流するためには、対等な学問レベルにあることが必要です。今後、少子化と経済状態の悪化が続けば、ますます教育にかかる予算は削減され、文部省が大学であると認定しても、国際的には大学と認められないような大学もでてくる可能性があるのではないかと、私は危惧しています。“大学は大衆化したのだから、低いレベルでよい”などと思っていれば、優秀な学生は誰もそんな大学には来なくなるでしょう。それは、大学といっても、大学ではないからです。とくに留学生の場合は、主として学位の取得や高度の研究を行うことを目的として日本に来るので、研究レベルの低いところに好んで来たいと思う人はいないはずで、し

たがって、国際化を促進するためには、まず研究を活性化し、様々な情報を国際的に発信することだと思います。少なくとも、学術論文の半分以上は国際的に理解できる言語で書くという目標をもっていていいと思います。私は、自然科学系の場合、研究なくして、高度で立派な教育というのはあり得ないと思っています。「自己点検評価しなさい」と突っつかれて、見かけ上立派な書類を作成しても、それだけでは、教育研究や国際化が活性化されることにはなりません。教官の研究を活性化するための方策については、様々な提言がなされていますが、実行されないことが多いように思われます。また、ある方策を実行した場合、どうなったか？つねに私達教職員が心がけ、点検することが重要です。そして、学部や大学では、教官の研究・教育の業績を評価し、人事や給与などに反映させていけば、一層教官の意欲も湧いてくるのではないのでしょうか。私たちは、非常勤講師として学外で講義すれば、何がしかの報酬をえます。しかし、外国人留学生や研究者を受け入れても、あの人は好きでやっている程度の評価ではないのでしょうか。そのような教育業績を客観的な指標 countable measure で評価する必要があると思います。

国際交流を促進するには、どうすればいいか？それに対する答えは、「(1)日本人教官・学生・職員が、日本人だけではなく、外国人にとっても魅力ある大学をつくり、(2)外国の研究者に向けて情報を発信し、(3)それを受け入れるための学内環境（事務、組織、建物、設備、財源など）を整備するという多面的な取り組みが必要である」ということです。この三つが、国際化ということに関して、求心的であれば国際化は促進され、遠心的であればあるほど国際化は衰退して行くと思います。日本人にとって好ましくない教育研究の環境は、外国人にとっても都合の悪い環境です。鹿児島大学の国際化をより推進するためには、様々な学内の環境（ハード、ソフトとも）を国際的な視点から改善するという観点が不可欠です。すなわち、狭矮なスペースの解消、研究器機の充実、研究予算の増額、国際的な視点をもった教官や事務官の育成、事務官・学生の英語教育、教官の英語能力の向上のための助成などに取り組むべきではないかと思います。とりわけ、研究能力と教育実績（留学生教育も含め）のある教官を多数育成し、特定の教官だけではなく、多くの教官が国際的な視点をもって教育研究を行うような環境を作りあげることが肝要と思います。まず、教官が海外を体験することが必要で、国際会議への若手教官の派遣（海外渡航への援助、助成）などは、国際的な視点を深める契機になり、将来鹿大を担う人材を育成することにつながると思います。事務的書類なども、部分的に英訳を付記したものを作成すれば、外国人は多大の便宜をうけ、事務官の意識も国際化をより意識することになるでしょう。学术交流に限って言えば、教官の国際的な学術活動は国際会議での講演、国際共同研究の実施、国際学会の開催の順で進展します。国際化を推進するための資金（予算）を獲得する努力なしには、飛躍的な国際化は望めないものだと思います。手軽でお金のかからない、一時的あるいは対症療法的な施策（それも必要ではあるが）のみを行って、国際化に対応したなどとお茶を濁すようでは国際化への飛躍的な進展は期待できません。予算をかけず、労働を強化することによってのみ、国際化をすすめるのは、長期的に無理があります。

(2) 留学生センターへの期待

多島圏研究センター教授 中 野 和 敬

1) 若い人たちの間に、異文化で育った者どうしが日常的に暮らすのは当たり前という気分を推進する組織としての期待

小生自身、30年近く前、博士論文の最終審査を終えた翌々日に生まれてはじめて日本を旅立ち、タイのバンコク郊外にある大学の大学院研究生として留学したことがあります。その時はユネスコ奨励研究生という身分で、年間1,000米ドルというタイ国政府が給付する奨学金で暮らしていましたから、バンコクに駐在する企業などの方々とは経済的には雲泥の差の境遇でした。おもにそのような事情のせいで、丸2年間のタイ国滞在中、現地調査で田舎へ出向いている期間を除いては、学生寮に一般学生と同室（3人部屋）で楽しく暮らせるという普通はあまりない機会にめぐりあえました。その学生寮の設備は、鹿児島大学の現在の国際交流会館とはこれまた雲泥の差でした。そのように学生と文字どおりパンツひとつの姿で毎日一緒に暮らしたことで、異文化で育った者どうしが日常的に暮らすのが当たり前という感覚が身につけられました。

文化の定義はざっと調べただけでも100をゆうに越すほど出てくると言われていますが、自分なりの定義を試みてみますと、やや粗雑であることは十分認めますけれども、「文化とは約束事のセットなり。」と考えています。異文化どうしの人たちが一緒に暮らすというのは、ですから、約束事のセットの違う人たちが日常的に接触するということにほかなりません。そこで、異文化で育った人たちが毎日つきあえば、約束が違うのですから、腹の立つことにしばしば遭遇するのは当たり前です。そこを、なるほど、相手の理屈ももっともと、感じられるようにまでなることが現代社会に生きる者が持ち合わせていなければならない教養の大切な部分でしょう。そのような教養は若いときに身につけないと、なかなか歳をとってからは育ちません。この意味で留学生センターが果たす意義は大きなものと期待しています。できれば、アメリカの大学では当然のこととなっているように、日本の学生と留学生との混住化の推進へ精力を傾けていただくと更に良いと感じています。

2) 見返り無しに学ぶことの楽しさを身につけるのを目標として勉強させることを含めて、発展途上国の人材育成へ積極的に寄与する組織としての期待

小生は職務上発展途上国、特に南太平洋の島嶼国へたびたび調査へでかけました。その都度感じたのですが、適切なカウンターパートを現地で見つけるのに、大変苦勞します。やはりそのような独立間もない国では、国際的水準の研究者が自国ではまだ育っていないことが多いからなのです。翻って日本の明治期を調べてみますと、近代的な学術分野では、はじめはほんの少し前までの南太平洋島嶼国同様、お雇い外国人が研究と高等教育を全面的に担っていました。けれども、20世紀に入る頃から、日本人でも、長岡半太郎とか野口英世とかの世界的な水準に達した研究者が少なから

ず現われました。それらの方がたのかかなりの人はヨーロッパへの留学経験があり、その後帰国しました。そのような留学生は帰国後優遇されるという確かな見込みがあったとはいえ、やはり、世俗的な見返りへの期待無しに学び、そして研究することそのものから得る喜びにきっとひたったものと想像されます。さもないと世界をリードするような学術業績は成し遂げられないのが普通であるからです。同様なことは、現在の発展途上国からの留学生にも当てはまるでしょう。世俗的な見返り無しに勉強することの楽しさをぜひ鹿児島で身につけてもらいたいものです。そのような経験が帰国後自国の学術水準を向上させる原動力となるでしょう。そのような人材育成の基礎的な環境造りに留学生センターが多大な役割を果たすよう期待しています。

(3) 大学間交流協定に基づく留学生の受け入れ

教育学部助教授 梅 崎 光

1) 湘潭大学外国語学院日本語学部

- (1) この数年間、湘潭大学（中国湖南省）外国語学院日本語学部から、若手教師を研究留学生として、学部生を日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生）として鹿児島大学に受け入れるべく文部科学省に申請してきている。
- (2) 鹿児島大学からは過去に何人かの教官が短期の日本語教師として派遣されていたがそれが行なわれなくなったのに代わって、上記のような形での交流が始まったらしい。

2) 教育学部国語科における受け入れの実績

- (1) 日研生：ほぼ毎年申請が通っている（10月から翌年9月まで1年間）。今までのところ湘潭大学の3年生を修了した学生が来日している。いずれも日本語能力の高い学生が推薦されてきている。
- (2) 研究留学生：1998年10月に受け入れた湘潭大学の日本語教師が最初（1999年4月、大学院に入学し、2001年3月に修了）。
- (3) 2001年7月現在の状況：研究留学生1名（2000年10月に来日、2001年4月から大学院に在籍）、日研生1名（2000年10月来日、2001年9月帰国予定）が在籍。

3) 受け入れ部門の問題

- (1) 過去の経緯から、たまたま教育学部国語科の教官が大学間学術交流協定に基づく上記留学生の受け入れ担当教官となっている。
- (2) 本来ならば、日本語・日本文学に関係する分野の方であれば、教育学部国語科以外の学部・学科の教官の中にも受け入れ教官としてふさわしい方や、こうした活動に積極的なスタッフも

おられるはず。そうした方々の意向を聞くこともなく今後も国語科だけが独占的に湘潭からの留学生を受け入れ続けるのは、大学間交流のあり方及び全学的な視点からして如何なものかという懸念がある。

4) 留学生の推薦候補者の選考

- (1) 湘潭大学から推薦された人をそのまま受け入れているが、問題はないのだろうか。
- (2) これは特に研究留学生と大学院進学の関係について言えることである。留学希望者への説明が適切に行なわれぬまま湘潭大学が推薦者を決めた場合、本人の志す研究内容に対して、大学院教育学研究科国語教育専修のカリキュラムや修士論文指導教官の専攻分野がマッチしないという事態が今のままでは常に生じうる。
- (3) また、日研生の興味・関心のありどころと教育学部のカリキュラムとの間についても同様の懸念があるが、これに関しては法文学部などの科目も履修するよう勧めることでやりくりしている。シンポジウム当日、《日研究生というのは体験的な要素が中心のプログラムなので受け入れ先のカリキュラムにはこだわらなくてよい》とのご意見をフロアから頂戴し、非常にほっとしたことであった。

5) 留学生に対するサポートのあり方

- (1) 上記のように、教育学部国語科のカリキュラムと留学生のニーズのギャップが生じた場合にどうフォローするかということを常に意識しておく必要があろうと思っている。湘潭大学から受け入れている大学推薦の日研生の場合は鹿児島大学についてある程度の理解をもって留学してくるのでまだよいが、大使館推薦の日研生の受け入れについては、少なくとも教育学部の場合は慎重でなくてはならないようである。
- (2) 日本人学生との交流：現状として、教育学部国語科内ではほとんどないのであるがこれは個人差があることでもあり、別の場所で交流が持てていればそれで構わないのかもしれない。

注：大学間交流協定締結の最初が湘潭大学で、留学生受け入れ、日本語教師派遣が最も活発に行われ、その窓口が教育学部であったため、国際化シンポジウム（第2回）で教育学部からの公演をお願いした。

(4) 国際共同研究による留学生の受け入れ 一つの国際共同研究を通して

工学部教授 土 田 充 義

1) 私の国際共同研究

日本建築史を専門とする私にとって、中国大陸は魅力があった。中国の土間の生活と日本の板敷の生活を比較することで、さらに民家研究が深められるかもしれない。それには現地に赴いて、中国側と共同研究を進め、民家の内部まで実測調査をして、十分な聞き取り調査もできる。是非共同研究を始めたいと計画を立てた。1986年在外研究員として10ヶ月間中国の廟を調査した時、湖南大学建築系楊慎初教授と会った。この初対面以来、楊先生と共同研究を進めたいと思った。それで、1994年4月2日再度楊先生を訪問し、共同研究の相談をした。その結果、5ヵ年計画を立てて、最初の2年間に漢民族の調査、残りの3年間に少数民族民家の調査にあてた。その資金には当面奨学寄付金を使うことにして、1回の調査に約200万円が必要であった。それは全費用を当方で負担するのがもっとも好ましいように思えたからである。そのとき大学院生4名と学部生1名を日本から派遣して、中国側教官3名それに通訳1名を加えて全員10名で共同研究を1994年7月8日から7月20日まで12日間行った。研究テーマは「湖南省南岳門前町の研究」として町家の悉皆調査をした。この調査を基に4年生島尾拓也は「湖南省南岳門前町とその町家に関する研究」と題して卒業論文にまとめた。またこの共同研究で湖南大学との学部間協定を結び、お互いに学術交流を深める道筋がととのってきた。大学間交流協定ではなく、学部間交流協定で進めざるをえなかった。それは2学部以上の賛同を得ないと大学間交流協定を結べない方針であったからである。当時の工学部長は国際共同研究に熱心で、学部長自身も国際共同研究に貢献しておられた。学部長から賛同をえなければ、協定締結までに至らなかった。それは工学部にとって学部間協定の最初である。最初は進まなかった。それは先端技術を重視する工学部にとってメリットがあるかどうか疑問視する傾向があったからである。

前田明夫学部長は湖南大学に赴いて1995年8月23日に調印した。これが工学部最初の学部間学術交流協定で、このとき湖南大学建築系と鹿児島大学建築学科土田教授との共同研究協議書に湖南大学副校長と鹿児島大学工学部長が調印された。この協議書には1994年度の南岳門前町の研究も含まれていた。その後協議書どおりに実行することができた。次に湖南大学との共同研究の内容を記す。

(1) 湖南省南岳門前町の研究（奨学寄付金）

現地調査（1994年7月8日～7月20日）

日本側 教官1名 院生4名 学生1名 計6名

中国側 教官3名

合計9名

(2) 岳陽県張谷英村の民家調査（奨学寄付金）

現地調査（1995年 7 月21日～ 8 月 1 日）

日本側 教官 1 名 院生 3 名 学生 1 名 計 5 名

中国側 教官 2 名 院生 1 名 計 3 名 合計 8 名

(3) 永順県の土家族の民家調査 科研費（国際学術研究）

現地調査（1996年 8 月16日～ 8 月27日）

日本側 教官 4 名 院生 1 名 学生 1 名 計 6 名

中国側 教官 2 名 院生 1 名 計 3 名 合計 9 名

(4) 鳳凰県の苗族の民家調査 科研費（国際学術研究）

現地調査（1997年 8 月15日～ 8 月26日）

日本側 教官 5 名 院生 2 名 計 7 名

中国側 教官 3 名 院生 2 名 計 5 名 合計12名

(5) 新晃県のトン族の民家調査 科研費（国際学術研究）

現地調査（1998年 9 月18日～ 9 月30日）

日本側 教官 2 名 院生 4 名 計 6 名

中国側 教官 2 名 院生 4 名 計 6 名 合計12名

(6) 寧遠県の瑶族の民家調査 科研費（地盤研究B）

現地調査（1999年 9 月23日～10月 8 日）

日本側 教官 3 名 院生 2 名 学生 1 名 計 6 名

中国側 教官 3 名 院生 4 名 計 7 名 合計13名

3 年間の共同研究を終えた段階で、中間報告会を鹿児島大学稲盛会館で平成 9 年（1997年） 5 月 2 日湖南省民家の共同研究中間報告書を作成し、湖南大学建築系と鹿児島大学建築史研究室共催で発表会を開催した。共同研究には調査方法や調査に対する考え方の相違がある。中国側は広く全体を把握しようとし、日本側は狭く深く追求しようとする。それに応じて寸法値のとり方も異なる。いずれがよく、いずれが悪いということではなく、各国で研究方法や研究目的が異なるということである。実測にあたっては平面実測を日本側が、断面実測を中国側がすることに役割分担を決めてとりかかった。各図化はそれぞれが持ち帰り、仕上げて、郵送で交換することになっている。毎年の調査でだんだん慣れてきて、帰国する時に中国側の実測図の写しを持ち帰り、私たちも実測図の写しを渡す。これによってお互いに調査結果を早めに出すことに努めた。

2) 言葉の問題

初年度（1994年）・次年度（1995年）は通訳に頼らないと全く調査を進めることができなかった。しかし、1996年と1997年に 1 名ずつ特別聴講学生として受け入れ、さらに湖南大学助教授柳肅を私費研究留学生をして受け入れ、1997年には研究室の晴永知之の助手が 1 年間留学し、同年短期留学推進制度で日本人学生を派遣しており、彼等が通訳することになり、第 6 次（1999年）調査の時には日本語が通じ、すばらしい共同研究が行えた。実に心強い調査であった。このように言葉の問題を

解決しえたのは研究者の派遣・受け入れ、学生の派遣・受け入れが軌道に乗ったからである。共同研究には研究者だけでなく、大学院生に参加させ、それを留学に結びつけることで一段と共同研究を進めることができた。

3) 研究者の交流 (いずれも日中民家の比較研究をテーマにしている)

・研究者の派遣

1. 晴永知之助手 1997年5月～1998年5月 (平成9年度国際交流基金フェローシップ事業)
2. 東英寿助教授 1996年8月16日～8月27日 (科学研究費)
1997年8月15日～8月26日 (科学研究費)
3. 揚村固助教授 (鹿児島県立短大)
1996年8月16日～8月27日 (科学研究費)
1997年8月15日～8月26日 (科学研究費)
1999年9月23日～10月8日 (科学研究費)
4. 米村敦子教授 (宮崎大学)
1997年8月15日～8月26日 (科学研究費)

・研究者の受け入れ

1. 楊慎初教授 1996年7月22日～8月4日 (科学研究費)
2. 柳肅助教授 1996年7月22日～8月4日 (科学研究費)
1997年9月～研究生
1998年4月博士後期課程入学
2001年3月修了
3. 張衛助教授 1998年8月16日～8月28日 (科学研究費)
4. 巫紀光教授 1998年8月16日～8月28日 (科学研究費)
5. 曹麻茹助教授 1998年8月16日～8月28日 (科学研究費)
6. 王小凡 1999年8月20日～9月1日 (科学研究費)
7. 戴菲 1999年8月20日～9月1日 (科学研究費)
2000年4月～博士後期課程在学

4) 学生の交流 (いずれも日中民家の比較研究をテーマにしている)

・学生の派遣

1. 福永尚敬 1998年3月～1999年2月 (短期留学推進制度派遣)
2. 倉富宗一郎 2000年3月～2001年2月 (短期修学推進制度派遣)

・学生の受け入れ

1. 戴菲 1996年9月～1997年8月 (短期留学推進制度受け入れ)
2000年4月～博士後期課程在学

- | | |
|-------|---|
| 2. 唐堅 | 1997年 9 月～1998年 8 月（短期留学推進制度受け入れ）
1999年 4 月博士後期課程入学
2002年 3 月修了 |
| 3. 李旭 | 1999年 8 月～2000年 7 月（短期留学推進制度受け入れ） |
| 4. 王暉 | 2000年 9 月～2001年 8 月（短期留学推進制度受け入れ）
2002年 4 月～熊本大学博士後期課程在学 |

5) 研究成果

何を研究成果と考えるかといえば、共同研究により執筆した卒業論文（日本側 7 名）、修士論文（日本側 5 名、中国側 2 名）、博士論文（日本人 1 名、中国人 2 名）をあげたい。それぞれを記すことは差し控えるとして、中国側で修士論文 2 編が湖南大学で審査を受け合格となったことはすばらしいことだと考える。それは共同研究が実を結んでいるからである。さらに評価したいことは博士論文を 3 篇提出され、工学博士を取得したことである。1 編は2003年 3 月取得を目指して執筆している。この博士論文の取得者と題名だけは記しておきたい。

柳 肅 2001年 3 月取得 題名「湖南省新晃侗族自治县における侗族民家に関する研究」

晴永知之2001年12月取得 題名「中国湖南省張谷英村と寧遠県の漢族の居住空間と集住形態に関する研究」

唐 堅 2002年 3 月取得 題名「中国湖南省鳳凰県苗族民家の内部空間構成に関する研究」

卒業論文・修士論文・博士論文を書くにあたり、審査論文 9 篇、研究報告 6 編、口頭発表論文 31 編が基礎になっている。

6) 結 び

実際に行われた 6 年間の共同研究は湖南省の民家研究に大いに貢献し、更に日本の民家研究に新たな視点を与えたと自負している。こうなりえたことは国際共同研究に学生を加え、それが留学に結びつき、成果をあげたことに他ならない。共同研究には研究者と同時に学生を参加させ、研究に巻き込むことの大切さを指摘して結びとしたい。

(1) これからの留学生受け入れと教育

鹿児島大学医学部

鹿児島医療学（ウイルス学）講座教授 園田俊郎

1. はじめに

外国に留学し勉強をする意義には2つのことがある。ひとつは、他国の文化（生き方、考え方、躰け、徳目、教育のシステムなど）や国情（社会のしくみ、生活レベル、治安状況など）を直接見聞して自国の文化や国のかたちを知ることである。もうひとつは、先進国の人文科学やサイエンスを学び留学の成果を母国の発展に還元することである。日本への留学生はこの20年間で指数関数的に増加したが1945年以前では極めて少数であった。急増の背景には日本の経済的地位の向上と国費奨学制度の確立がある。アジア諸国の留学生に対しては戦後賠償的な意味で多額の奨学金が購われているが、わが国の平和外交の一環として有意義なこととおもわれる。しかし、国費支弁には限度があり、私費留学生数が国費の10倍にもなっている現状を考えると「留学生の受け入れと教育」の中身が問われている。この基調講演では、私が過去15年間に16名の留学生や短期研修生をうけいれた経験にもとづいて留学生教育についての所感をのべる（82ページ参照）。

2. 言葉の障壁をのりこえる

言葉は人間の思想を伝える道具であり、正しい日本語の表現と理解は日本の文化と国情を理解するうえで不可欠である。留学生にはまず日本語を学習させる必要がある。留学生センターの設立を機に系統的な日本語研修がはじめられていることは同慶の至りである。日本語でコミュニケーションができると日本語での思考ができるようになる。これによって、専門教官との交流もでき勉強の幅をひろげることができる。とくに、留学生の若手教官との交流は近未来での時間と空間を共有した人間関係が生まれ海外留学の意義がさらに大きくなるとおもわれる。若手教官は外国語に必ずしも堪能ではない。留学生の基礎的な日本語研修は、若手教官、研究者、大学院生、学生との交流を円滑にするために必要不可欠の要件である。

3. 日本社会の国際化に役立てる

外国人留学生の存在は受け入れ大学の教官や学生にもインパクトを与える。留学生を通して他国の文化や国情を直接見聞することができれば、日本社会にいながらにして外国留学と同じ効果が期待できる。良き緊張関係で交流がすすめば留学生にも受け入れ側にも有益である。人類社会の新しいパラダイムでは地域に立ちグローバルに考え行動することが求められている。日本社会の良き規範を世界の平和にむけて主張する堂々の器量を「留学生の受け入れと教育」を通じて学ぶべきである。

鹿児島大学の学生には留学生のチューターとして積極的に参加してもらい、国際感覚を涵養して将来の国際貢献に役立ててほしい。

4. 過度の処遇は禁物

わが国のなりたちには外国の文物、文明の利器が大いに影響をあたえてきた。このため外国優位の思想が日本人のインテリ層のなかにあるかもしれない。遣随使、遣唐使の時代には中華思想が、明治時代以降には拝欧、拝米思想が主流となった。過度の外国崇拝は日本の美しい文化をゆがめ誤解を招くおそれがある。留学生の受け入れと教育に際しては、現在のグローバルスタンダードを理解したうえで日本の役割を正しく認識させる必要がある。できれば、資源に乏しい日本の国土も開示し小国の生きざまを直視してもらうことも大切とおもわれる。小国ゆえの勤勉さと「Small is beautiful」の精神も理解してもらいたい。そして、留学エリートの特権を未然にふせぐ努力を留学生自身に学ばせたい。留学生が帰国したのち母国で活躍できる支援体制も重要とおもわれる。この支援体制の構築は日本の資源（税金）を無駄にしないいううえでも早急に取り組むべき課題である。

5. 優秀な留学生を受け入れる

鹿児島大学は日本の最南端に位置し中央（東京）から遠い。中央志向の若者からは敬遠されがちであり、良き人材が集まりにくい状況である。「Gate for South」の地の利を活かし、東南アジアや西太平洋諸国の留学生をうけいれ、優秀な人材を発掘することも一策である。近い将来には、鹿児島大学の外国人留学生が本学の教官として採用され、教鞭をとることも可能かもしれない。ここでは、鹿児島大学のアカデミズムが国際化を基盤に充実し、国内外の学生が学問の豊かさを享受できる日がくることを期待している。

6. 国際島嶼医療学の展開と留学生教育

平成13年4月1日付けで鹿児島大学医学部離島医療学講座が新設された。この講座は離島のプライマリ・ケア、高齢者医療、離島特有の疾病の研究とこれらを担当する若い医師の育成をめざしている。ここでは、情報技術（I.T.）を駆使した遠隔医療（Telemedicine）や遠隔教育（Long distance education）が見込まれている。鹿児島の離島海域での遠隔教育のモデルを東南アジア・西太平洋、カリブ海へ展開すれば国際島嶼医療学の確立にもなる。このなかで、東南アジアからの留学生の役割がもっとも期待される。鹿児島大学が保有する船舶で東南アジア諸国の島々にアクセスし、洋上大学を開講し優秀な受講生にはクレジットを与える制度も考えられる。I.T.による遠隔教育システムを組み合わせれば、従来の留学生教育（鹿児島大学に在籍させ教育する）と異なる国際教育と異文化交流を効果的に行うことができるとおもわれる。これを実施するためには現行制度の見直しが必要であるが、21世紀の国際化にむけての先鞭をつける意味からも、洋上大学の構想は新鮮かつ有意義とおもわれる。

ウイルス学講座で受け入れた外国人留学生・研修生（1988－2001）

劉俊（重慶医科大学）

Michelle Blank（Velle University）

Liusa Valentina Hurtado（San Andres University）

Chattri Settasatian（Khon Kaen University）

Sonia King（West Indies University）

Jose Vega Bonilla（Costa Rica University）

Bernd Kitze（Goettigen University）

林 哲生（台北医科大学）

Carolina Lema（Bolivia INLSA）

Jorge Cervantes（Heredia Medical College）

Angela Manns（US NCI）

李 洪川（重慶医科大学）

楼 宏（重慶医科大学）

Celeste Rodriguez（San Andres University）

Mike Mai（Miami University）

Lucia Soblin（Miami University）

（2）日本語・日本文化教育の可能性

留学生センター 大 嶋 眞 紀

シンポジウムではまずはじめに、留学生にとって、日本語とはどういうことばなのかということをお話ししました。日本語という山にはどういう難所があり、留学生はそこをどうぐり抜けて登っていくのかといったことです。

9割以上の留学生が「むずかしい」と言い、半分ぐらいの学生が「むずかしい」のあとに、そつと囁くような声で「でもちょっとおもしろい」とつけ加えてくれます。けれども残念ながら1割ぐらいの学生は完全に途中下車。また日常会話の域で踏みとどまってしまう人も少なくありません。

留学生の目から見た日本語、いったいどんな難所があるか。日本人の目には見えにくい部分に焦点をあててみました。

1 日本語はなめくじのよう？

留学生センターでは来日して数日もたたない留学生にひらがなの指導をしています。これがなか

なかの関門なのです。

ちょっと想像してみてください。「ぬ」「め」「ね」「れ」「わ」。留学生にはこれらはいったいどう見えるんでしょう？ 何、何？ どこがどうちがうんだ？ なめくじみたい。しっぽをはねていようが、丸めていようがどれも同じに見える。

そうなのです。日本人がたとえば、タイ語なんかの文字を見た時、あまり区別がつかないのと同じ理屈です。センターでは日本人学生ボランティアの手も借りて、一つ一つ発音練習をしたり、文字を認識し、音に出し、さらに記憶する、また音声を聞いて文字に変換するなどの練習を積み重ねていきます。もし留学生がみなさんの周りでそんな練習をしていたら、ちょっと見てあげてください。

2 歌まである音便形

動詞の音便形っていったらわかりますよね。学校文法でさんざん教わりました。「書いて」はイ音便、「買って」は撥音便という風に。でもよく考えてみると、日本人なら三歳児でも「お母さん、これ書いて」とか「これ買って」と正しく言えます。学校文法というのはすでに体験的に習い覚えた正しい形をあとから分類しているにすぎないわけです。もちろんだからといって価値がないということではまったくありません。

けれども留学生の場合、学ぶ順番がまったく逆だということをよく認識していただきたいと思うのです。それが日本語教育と呼ばれている領域の仕事でもあるわけです。

どういうことかといいますと、留学生の場合、「イ音便」「撥音便」なんて言葉や分類を覚えるのは記憶の負担になるばかりで、あまり役にたちません。では留学生は何をするかという、はじめに「書きます」とか「書く」という基本的な形を学びます。次に来るのがこの音便形。けれどもこの形を留学生の立場にたって生み出そうとすると、かなりの量のルールが必要なのです。どういうルールかといいますと、例えば「会う」「立つ」「帰る」などという動詞は「って」という形になるというルールです。ここで促音便などという言葉を知るよりも、「会って」「立って」などと口に出して言えることの方がまず必要なわけです。そうしないと日々、生きていけないからです。

で、このルール、実は五十音図の各行によって形が決まるので、日本語教育の世界ではついに歌まで出来ました。「うつるって、ぬむぶんで、すしてぐいでくいて、くるきて、するして、て形です」これが「サンタがやってきた」のメロディーにのって歌われるのです。みなさん、この歌、解析できますか。もし、みなさんのまわりの留学生がこの妙な歌を口ずさんでいてもびっくりしないでください。また留学生が初級をはるかに終えた段階で、もしまちがった音便形を使うようなことがあったら、そういうことは実によくあるのですが、その時はこの歌を歌って教えてあげてください。

その他にも日本語は膠着言語であるということは留学生の身からするとどういうことなのか。またいわゆる「やりもらい表現」というのはどういう点でユニークか、またそれゆえ留学生にはなか

なか使いこなせないことなどもお話ししました。日本語は対人関係に大変敏感な言語であり、そのために豊かな敬語体系があるわけですが、留学生はこの「敬語の海」に溺れかねないこと、それよりもさらに困難なのは漢字の習得でこれはいわばシジフォスの岩みたいなものだというお話もしました。

日本語は留学生にとって山あり谷ありの言語にはちがひありませんが、留学生は日本にいるという最大のメリットを活用すべきですし、また留学生の周囲にいる方々も視点をちょっと留学生の目に合わせてくだされば、きっとさまざまなやり方で留学生の日本語学習を助けていけるのではないだろうかというのがここまでの私の結論です。

次にお話ししたのは日本文化のことです。日本文化といっても、これもまた広くて深くて海のよう。いったいどこから手をつけたらいいのか。そもそも文化というのが定義しきれないのでから無理もないことです。で、ここでも留学生の目から見たら日本の文化はどのような風に見えるのかという話をしました。

3 留学生にとって日本文化とは何か

私は最近、このテーマで留学生とプロジェクトタイプの授業を行いました。シンポジウムではそのプロセスと結果を簡単にご紹介したわけです。結果といっても大したことではないのですが、次のような簡単な分類表ができあがったというわけです。それでも留学生の視点が捉えられるかなと思いました。いわば出発点といってもいいかもしれません。この起点から何が見えるか。それが未来の可能性を語ることに繋がるとよいと思った次第です。

- ・ 入国してすぐ体験する文化
- ・ 入国してしばらくしてから体験する文化
- ・ 時間をおくにつれて体験する文化
- ・ 目に見えない文化
- ・ 外構えの文化
- ・ 史的文化

ふだんこういう分類はあまりしません。また分類方法としても厳密なものでもありません。ただ留学生はこういう順番で日本の社会、日本の文化、日本人のものの考え方に接近していくらしいというだけのことです。内容を少しだけ紹介しますと、「入国してすぐ体験する文化」の中には「日本での第一印象」とか、来日してすぐ訪れる「研究室の文化」などというのが含まれます。そういう状況の中での日本人のふるまい方、例えば空港での、何度も頭を下げる挨拶法とか、研究室の中にある、必ずしも明文化されていない暗黙のルールなどといったことが留学生には大変新鮮であるとともに、わかりにくいことでもあるという指摘もあります。

日本の政治や教育制度といったことは上の分類では「外構えの文化」、留学生が時に趣味としてあ

げる茶道や武道などは「史的文化」などに分類されるわけですが、そのどの分類領域にも認められるのが「目に見えない文化」であるということも大変興味深いことではないかというお話をしました。日本人は挨拶を重視するけれども一方で虚礼の要素が多いのではないか、曖昧さは美か、過剰な集団意識はなぜ生ずるか、自己抑制的であることの素晴らしさ、留学生はどういう時に日本人のよく口にする「気くばり」が足りないか、「気くばり」は日本文化特有であるのかどうか、学習できる項目なのか、日本人なら誰でもできるのかなどという留学生の抱く疑問、内省そういったすべてが反映された分類ではないだろうかと私は思うわけです。

以上がシンポジウムでお話しした、あるいはしそびれたけれどもしたかった事柄のだいたいのまとめです。これからも留学生センター、そして留学生をよろしくお願いします。

(3) 私の受けた日本語教育

鹿児島大学医学部

第二生理学講座講師 はお 麗 英

日本語をまったく知らないまま日本に来た私にとって日本語を話せるようになるまでは本当に大変な努力が必要でした。でも、いい経験でした。この経験がこれからの留学生教育のお役に立てられることであれば、幸いです。

来日は1994年6月1日で、その4ヶ月前に日本に行くのが分かりましたが、様々な準備があり、日本語を勉強することが出来ませんでした。しかし、大丈夫だろうと思い、言葉のことはそれほど心配しませんでした。しかし、日本に上陸してすぐにその考えがあまかったことに気がつきました。福岡で鹿児島行き飛行機を待つ時、空港のアナウンスは私にとってまったく意味のないただの音に過ぎませんでした。鹿児島という言葉しか知らないの、耳をそばだてて、一生懸命アナウンスから“鹿児島”を聞き取ろうとしていました。大変ストレスでした。その時から、言葉をしっかり勉強しようと思いました。

勉強しようとしても、分かるようになるまでは時間が必要です。留学生活が始まった以上、すぐに人と交流しなければなりません。研究の方は主に英語を使うので、特に支障がありませんでしたが、日常生活の方はめちゃくちゃでした。まず body language で意味を表します。分からなかったら、漢字をかきます。それでも分からなかったら、絵を描きます。このようにして、ある程度の交流ができましたが、頼れる方法ではありません。

どうすれば速く上達できるでしょうかと友達と話をしたら、いいことを教えてくれました。留学生会館に日本語クラスがあるということでした。嬉しくて、さっそく通い始めました。週2回夜6：30から8：00、一年間通い続けました。桜ヶ丘に住む私にとっては簡単なことではありませんでしたが、大事なことであるので、頑張りました。また、中国から持ってきた日本語教科書を使って毎

日自習をしました。学んだことを日常会話で積極的に使い、ホームステイなどの交流活動にも積極的に参加し、言葉使いの間違いがよくありましたが、いつも直してくださったので、更に勉強になりました。このようにして、日本語が少しずつ分かるようになってきて、留学生活も楽しくなってきました。

次は研究の方も日本語が使えるように努力しようと思いました。それまでは、学会の発表などは英語で行っていましたが、よりよく交流できるなら、やはり日本語のほうが良いと思って、英語から日本語に切り替えました。最初は話をしたいことを全部書き込んで、漢語に読みかなをつけて、文法も直して頂いて、それによって練習してから話をするという状態でしたが、だんだん書かなくても、思った通りに話せるようになりました。来日してから4年後、学位論文説明会の日が近づいてきました。英語でもいいのですが、日本に留学し、日本語の学習にいっぱい苦労したので、日本語でしようと思いました。うまく出来るかと心配で、また3ヶ月間週二回郡元キャンパスにある日本語クラスに通いました。結果は説明会が無事終わり、質問に対しては全部正しく聞き取り、分かるように答えました。英語の助けはぜんぜん要りませんでした。嬉しかったです。

一つの言葉を学びました。反省すると、一番助けとなったものは日本語クラスですが、一番苦労したものも日本語クラスです。その時は医学部に日本語クラスがなかったので、通うのは大変でした。昼間の授業だったら、時間的に益々不可能です。私は郡元キャンパスにある授業（午後4：10－5：40）に通う時、授業または実験に間に合うように何回もタクシーを利用しました。留学生としての私にとっては、経済的にも大変なことでした。今は医学部にも日本語クラスがあり、医学部の留学生は外に行かなくても日本語を学ぶことができます。本当に良かったです。もう一つは日本に留学しようとしたら、留学する前に日本語の基礎を学んでおいたほうが良いということです。私は頑張りましたが、やはり基礎がなかったので、進歩が遅かったです。実用にせまられ、話さなければならなかったのも、間違いが沢山ありました。ここで、私の変な日本語をがまん強く聞いてくださり、間違っても正しく理解してくださり、正直に直してくださった日本人の先生方や友達にもう一度“有難う”と言いたいです。でも、不思議なことに、私は間違いが沢山ありましたが、決して大した誤解が起きませんでした。何によって保護されたかと考えると、日本人の心やさしさはもちろんですが、やはり同じ人間であり、ここが通じるからです。このことが分かったとき、すごく自分の心が広がったと感じました。これは日本語学習の意外な収穫とも言えます。

(4) 私の受けた日本語教育

農学部生物資源化学科助教授 ヒッシャム・イブラヒム

私が日本に来てからもう14年間たちました。この14年のうち、鹿児島ではもう6年になりました。私は昨年のこの国際化シンポジウムに出席することができませんでしたが、ほかの先生方との話に

よりますと、懇談会では日本の生活や日本語教育について、自分たちの意見とか不満などを留学生が言うチャンスがあったように聞いています。今年、こういう講演会に参加させていただきまして、ありがたいと思っています。

今年のテーマですが、「私の受けた日本語教育」について、かなり支離滅裂なことになるとは思いますが、二つのことを取り上げたいと思いました。

一つは、日本語の印象についての感想をちょっとお話ししたいと思いました。日本語では「あいまい」と言われる表現がたくさんありますが、曖昧な表現は外国人にとって微妙でわかりにくいものです。例えば「... じゃないですか」とか、また「ちょっと」という表現です。なぜこれらの表現は外国人にとっておもしろいか、ちょっとお話ししたいと思いました。

もう一つお話ししたのは、日本に来て日本文化や日本人の生活習慣に接して、母国の生活習慣と大きく異なることです。私はまだまだ日本の社会と日本文化の生活習慣を深く認識しているわけはありませんけれども、ちょっと日本人の会話についてお話ししたいと思いました。

以上が、簡単ですがシンポジウムでお話しした内容です。

(5) As a Foreign Students' Advisor

Miguel Vazquez Archdale

Assistant Professor, Faculty of Fisheries

This is a short summary of a speech given by me at the Internationalization Symposium. Please pardon me, but I will be expressing myself in English for the benefit of all. In the beginning I spoke about my impressions of Japan as seen through the eyes of a foreign student. I mentioned my struggles trying to learn the language and to understand the culture during my first six months at Kyushu University, where I received my intensive Japanese language training. What I remember most is how busy the other foreign students and I were doing the intensive homework and studies. I think we would have probably benefited more from a more extensive education, and gained much by having a little extra free time to travel, see and communicate in the “field” with the Japanese.

My next two years were spent doing research at the Faculty of Fisheries here in Kagoshima. Most of my social interactions were limited to a few crabs, the foreign students at the International Students Residence Hall across the field from my laboratory, and the members of the last. Though quite successful for research, those two years were very narrow regarding interactions with the Japanese and their culture. I fear many foreign students return to their countries after completing their studies with very strange ideas of what Japan is really like, not having seen things outside

their departments.

For the past three years I have been an advisor for foreign students at our university, a tricky thing to do if you are trying to teach and do research at the same time. During this time many students have come to me seeking advice. These are nowhere near all, for there are those who adapt well to the new environment and also those who do not like to share their problems with anybody else. Below I describe some of the problems that continue to appear and need to be solved.

After their arrival, many students suffer trying to survive far from their home and family, have language and cultural misunderstandings, are homesick or develop poor relationships with their research advisors. It is at this time when their Japanese tutors could be of great help by giving them their support and showing them how to see things from the Japanese point of view.

After this initial adaptation period the troubles usually tend to change, and commonly heard complains are lack of time to do other things, such as travel, hobbies or spend time with their families and friends. Please try to remember that holidays overseas are often longer and more numerous than in Japan, particularly in school and universities. There are also occasional accidents and students suffering from loneliness or cultural isolation.

Last and most are those problems involving the ever-growing number of over-doctor students (those who cannot finish their PhDs within the required 3 years). Their main sources of stress being lack of income, since they do not receive their scholarship after their third year, and not being able to publish the results of their research. Many blame this on external factors, such as poor relationships with their advisors, while others admit their loss of interest and becoming tired after years of continuous research.

Finally, to find what can be done to improve the situation of foreign students it is very important to identify their sources of distress. For this there are only two ways: one is to ask them what they would like to see improved; and the other is to listen carefully to their complaints, and try to do something to make better their condition. Good progress can be made this way, as in the recent improvements at the International Students Residence Hall.

(本講演は実際は日本語で行われたことを付記しておきます——編集担当記)